

園番号 717

令和2年度 奈良市立辰市こども園 研究実践概要

園長名 辻 久代
全園児数 175名

1. 研究主題

「心動かし、意欲をもって生活する子どもをめざして」
～「やってみたい」と、思える環境構成や援助の工夫～

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

子ども達が「もっと遊びたい」「楽しい」「明日も続きがしたいな」と心から思える園庭、保育者にとっても魅力ある園庭になるような環境の工夫を探る。
また、密を避けながら、子ども同士が友達の遊びを意識できるような場の設定を意識し、その中で、心動かし意欲をもって生活する子どもの育成を目指した。
幼児・乳児それぞれの保育者が話し合いを重ねながら魅力ある園庭を築き上げていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・昨年度の反省をもとに、子どもの成長発達段階に応じた環境構成の工夫を職員全体で共通理解しながらつくっていく。
- ・子どもたちが1年を通して色々試したり、友達と一緒に遊びを進めたりしながら、「明日もこの続きをしたい」とめあてを持って主体的、意欲的に活動に取り組むことができる環境構成のあり方を探る。
- ・環境を図式化し、保育者間で遊びを共有したり、園全体の環境を意識するように努めたりする。

②研究の重点

- ・子どものことばや、友だちとの関わりを丁寧に見取り、夢中になって遊び込める環境や保育者の援助を探る。
- ・乳児・幼児の職員間で連携を取りながら、具体的な取り組みを話し合い主題について共通理解を図る。

③活動の方法

【乳児】

0歳児

- ・育児担当制の中、特定の保育士が関わり子ども一人一人が安心して自分の思いを出せるように努めてきた。保育室の環境では体全体を動かして遊ぶ場・緩やかな坂や段差・潜ったりくぐったりできる場など発達段階や個々の成長に合わせ、遊びたいと思えるような工夫をしてきた。
- ・子どもの表情や泣き声、しぐさを見取ったり、視線を合わせゆったりと語り掛けたりして、安心して自分の思いを出しながら生活したり遊んだりできるようにかかわってきた。

1 歳児「まつぼっくり転がし」

ビールケースと段ボールで作ったスロープとまつぼっくりを、子どもたちの目のつくところに準備をしておく、興味をもったA児が近づいてきた。保育者が「ころころ」と言って、まつぼっくり転がすとA児も同じように「ころころ」と言いながら転がす。「Aちゃんのまつぼっくり転がっていったね」と、保育者がA児の顔を見ると、A児は「もう1回」と、嬉しそうな顔をしてまつぼっくりを何度も転がして遊んでいた。

<評価>

- 子どもが興味・関心を持ちそうな物を予想し、保育者は環境を整えることが大切であることがわかった。また保育者も一緒に遊ぶ中で、楽しんでいる姿を見せることが子どもに安心感を与え、「やってみたいな」と、遊ぶ姿につながった。

2 歳児「いらっしやいませ・どうぞ」

11月頃、まつぼっくりや千日紅、落ち葉などの秋の自然物を使って、保育者と一緒に砂場でご馳走づくり等の見立て遊びを楽しんでいた。より遊びの充実を図るため、3学期は、なかよしハウスのそばに、皿・コップ・スプーンやフォーク等の用具と、草や花等の自然物を準備した。保育者がケーキをつくって見せると真似てつくようになった。保育者が「ケーキみたいでおいしそうだね」と言うと、まわりの子どもたちもなかよしハウスの中でつくり始めた。ケーキができあがると「いらっしやいませ〜どうぞ」と窓から顔を出し、保育者やそばにいた友達にケーキを渡していた。

<評価>

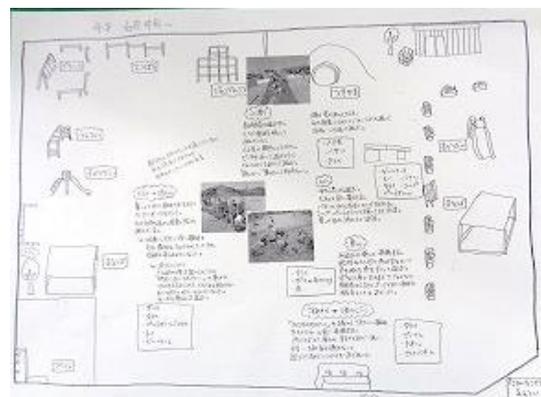
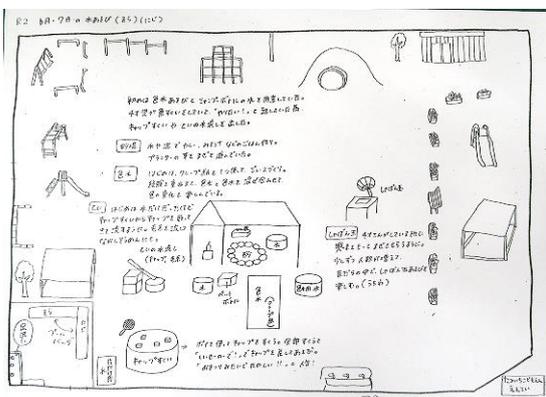
- 子どもたちの遊ぶ姿や発達段階に応じ、素材や用具を見直し、場を再構成したり、保育者が一緒に遊びを楽しんだりしたことで、ケーキづくりをしたり、簡単な言葉のやりとりをして遊ぶ姿につながった。



【幼児】

今年度は臨時休園中に昨年度の経験やとコロナ禍での園庭の使い方を十分に話し環境図をつくり、その図を活用し保育者間で遊びの場を考えたり、見直したりと環境構成について話し合いを持ち、環境作りに努めた。

そのことで、子どもにとって魅力ある環境を整えるためには、保育者が、日頃から園全体の環境を意識し、遊びにつながる働きかけをしたり、改善していったりする必要があることがわかった。



【3歳児】6月 またしたいな

3歳児は初めての集団生活の子ども達もいるので安心して遊べる環境作りを中心に考えた。

靴をはいたらすぐに遊べるように保育室の前に、テントを建て小さい砂場をつくった。始めは型抜きやままごとなど砂遊びから始めた。暑くなったのでペットボトルやシャンプーボトルに水を入れ準備をした。毎日同じ場所に同じ環境が整えられていることに少しずつ緊張もほぐれ、したい遊びを見つけて楽しむ姿が見られるようになってきた。

6月、クレープ紙を使っての色水遊び、砂、水、泥の感触を感じられる泥んこ遊びや水遊びをした。6月後半には少しずつ視野も広がり「お兄ちゃんたちがやっている魚すくいしたい」「おもしろそう」と異年齢児の遊びに興味を持った。そこでペットボトルのキャップすくいを準備すると、初めは一人でずくって遊んでいたが、友達と「せーので」とすくったり、「こんなのとれた」「私はこれだけ」「おまつりみたいやなあ」と友達と関わりながら夢中になり繰り返し遊んだりする姿が見られた。色水遊びにあまり興味を示さなかったA児は「おまつりみたい」と、夢中になってくり返し遊んでいた。保育室に戻ると「水遊び楽しかったなあ」「またしたいなあ」と保育者に笑顔で話す姿がみられた。

<評価>

- ・ 昨年度の経験を活かし、3歳児は子ども達が落ち着いて遊べるように、保育室前に場を設けた。毎日、保育者に見守られ同じ場で安心して遊べる環境が、子どもの不安や緊張をほぐし、したい遊びを見つけて遊ぶ姿に繋がっていったと考える。
- ・ 子どもの言葉に寄り添い、遊ぶ姿を見ながら、用具を準備したり、遊びの場を整えたりした。子ども達の「楽しい」「もっと遊びたい」という思いを引き出すためには、子どもの言葉を受け止め、遊びの姿から、環境を見直し、整えていくことが大切であると感じた。



【4歳児】1月 明日は固まっているかな

1学期より園庭に咲いている花や草、2学期には遊びの場を固定し、給食の果物の皮などを使って色水遊びをレストランごっこに発展させて継続的に遊んでいる。

雪がたくさん降った次の日、外へ遊びに出ると子どもたちは一目散に雪の積もったところへ走って行く。「歩いたらギコギコ鳴ってる」「スルーってなった(滑った)」「冷たい」と言いながらも触ったり、たくさん集めて丸めたりしている。お皿に入れるとかき氷みたい！と、かき氷づくりが始まった。2学期に遊んでいたジュースづくりの色水を思い出し、レストランコーナーから自分たちで必要な用具を準備し、パンジーやビオラの花びらをすり潰し、黄色や紫の色水をつくり雪の所にかけてとぶどう味やレモン味、ソーダ味のかき氷ができた。「このまま置いておきたい」と、片付けずに置いておく。

次の日に見て見ると「先生！氷になってる！」「すごい」「固まった！」と黄色や紫色の氷に喜ぶ。氷をパンケーキやハンバーグに見立てたり、氷を擦り棒で細かく砕き、皿に入れかき氷や色水のジュースの氷を入れたりして遊んでいた。「もっとつくりたい」「明日は固まってるかな？」と、たくさんの色水をカップに入れて毎日楽しみにしていた。

<評価>

- ・ 遊びの場を固定し、いつでも遊べるように用具などを準備しておいたことで、色水遊びから氷づくりまで、自分たちで継続的に遊びを進めていく姿が見られた。
- ・ 氷のできている日、子どもの発見を大切にタイミングよく遊びに取り入れることで、氷の感触を味わいながら遊ぶことができた。



【5歳児】10月～2月 お話『エルマーのぼうけん』を読んで

秋頃から読み進めてきたお話「エルマーのぼうけん」。読み終えた頃に、エルマーごっこが始まり、お話の中に出てくる道具やリュックをつくることを楽しんでいた。「エルマーみたいに、冒険に行きたいなあ」「じゃあ、コースを作ろうよ」「一本橋とかはしごとかつなげよう」と話が進み、サーキット遊びが始まった。昨年度の経験より、倉庫に用具があることを知っており、友達同士で協力して運ぶ姿もあった。遊びの準備が直ぐにできるように、近くにテントを用意し用具を置いたことで、子ども同士で遊びをスムーズに進めていった。「暗いジャングルもつくりたいね」「黒の大きいビニールでトンネルにするのはどう？」「ぴよんぴよこ岩はタイヤにしよう」「その下は海やから、ブルーシートを広げよう」とお話を思い出しながら、友達とイメージを膨らませていた。しかし、サーキットを置く順番で、それぞれのイメージは膨らんでいるが、共有することが難しく、思いの食い違いがあったので、園庭の見取り図を描いた【ぼうけんの地図】を用意した。すると、用具置き場の近くにあった机が話し合いの場となり、地図と用具置き場に置いてある用具を見ながら「初めは一本橋を置こうよ」「じゃあ、次はこのジャングルね」「ジャンプの所は最後にしよう」などと、子ども同士で話し合い同じ目標に向かって遊びを進めていくことができた。

また2月の作品展ではエルマーのぼうけんを共同制作のテーマとし、アイデアを出し合いながら製作に取り組んだ。「本物のエルマーのぼうけんみたいやな」「絵本の中にいるみたい」とみんなと共有してきたイメージが形となり、達成感を味わうことができた。

<評価>

- ・ 昨年度に親しんできた用具は、扱いも慣れており、子どもたちが自ら準備しようとする姿があった。遊びの場の近くに用具置き場を準備したことで、スムーズに遊びを進めることが出来た。また、友だち同士で話し合いながら遊びを進めてほしいという保育者の思いから、園庭の見取り図を用意したことで、遊びの目標が視覚的に分かりやすくなり、自分たちで遊びを楽しもうとする姿に繋がった。
- ・ 十分に遊びこんだ経験から、作品展でも友達と同じ思いを持ち、共に製作する姿が見られた。



5. 研究の成果

- ・ 今年度は環境図を図式化したことで、保育者間で遊びの共有をすることができた。
- ・ 遊びの場や環境が整っていたことで、子どもたちも遊びの把握ができていた。
- ・ 乳児期は特定の保育者が見守ったり手を差し伸べたり、保育者自身が楽しそうに遊ぶ姿を見せることで安心して遊びに取り組み、その中で楽しさを感じることができる。

6. 今後の課題

- ・ 今年度、作成した園庭の環境図を生かし、次年度も子ども達が意欲的に遊びを進められるように環境の構成や援助に取り組んでいきたい。
- ・ 今年度の残した記録を生かし、これからも年齢の発達に合った環境づくりをしていくと共に保育者間での連携をとっていきたい。
- ・ 今年度はコロナ禍の中での保育・教育であり、異年齢児との交流を持つ機会が少なかった。来年度もコロナ禍が続くであろうこと・減少するであろうことを考えながら臨機応変に対応できるよう、職員間でしっかりと連携を持ちながら取り組んでいきたい。